南ぬ風

ふぇーぬかじ

一般財団法人 沖縄美ら島財団 広報誌

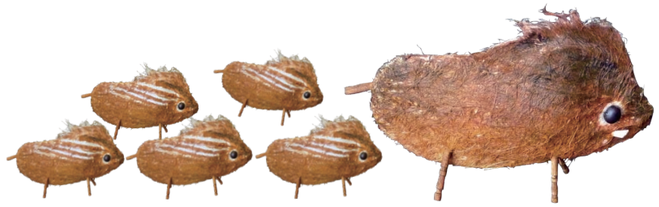
Vol.29
2013.10~12
秋号

美ら島 ワクワク工作室

身近な素材を使ったクラフトや工作、昔ながらの手作りおもちゃなどを紹介します。

マンゴーの種子の準備

食べ終わって残った種子をよく洗い、果肉をこそぎ落とす。きれいに落とした後、漂白剤を入れた水(10%)に1日程度漬けておき、取り出してよく水洗いしながら残りの果肉を除いて乾燥させると白いマンゴーの種子ができる。



種のクラフト(マンゴー猪)

材料

洗ってよく乾燥させたマンゴーの種子、ダンドクの種子(スイカの種やビーズでも代用可能)、つまようじ、ニッパー、千枚通し、接着剤、着色する場合は絵具

作り方

❶ 前足の位置に千枚通しなどで穴を開ける。

❷ 短く斜めに切ったつまようじの先にボンドをつけて穴に差し込みながら長さを調整。

❸ 同様に前後左右の足と尾もつける。親猪の場合はキバをつけてもよい。

❹ ダンドクの種子をニッパーで2つに割り、目を作る。(スイカの種やビーズでも代用可)

❺ 目をつけて、うまく立つように足を調節する。

❻ 色をつけて完成。

ダンドクってどんな植物?

ダンドクの花

ダンドクの種子

ダンドクはカンナ科の多年草で、沖縄県内・八重山に自生しています。沖縄の方言で「マーランバショウ」と呼ばれ、花の色は黄色か赤、6月~9月ごろにかけて花を咲かせ、丸くて黒く硬い実をつけます。

沖縄美ら島財団の工作教室に参加してみませんか?

当財団では主にお子様を対象として「美ら海・美ら島工作室」や「クラフト作り」等を開催しています。
参加ご希望の方は下記ホームページでイベント情報をチェックしてみてください。

美ら島研究センター
http://okichura.jp/ocrc/event/kousakushitu/

沖縄県立 名護青少年の家
http://www.opnyc.jp/

海洋博公園
http://oki-park.jp/index2.html

一般財団法人 沖縄美ら島財団広報誌
季刊誌 南ぬ風 秋号 vol.29 2013.10~12

編集・発行/ 一般財団法人 沖縄美ら島財団 Okinawa Churashima Foundation

2013年10月発行

〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町字石川888 TEL.0980-48-3645 FAX.0980-48-3900

巻頭インタビュー

美ら島をつなぐ人

Vol.3

映画監督

本郷義明

HONGO YOSHIAKI

琉球の歴史・文化に迫る骨太のドキュメンタリー映画を手掛ける気鋭の映画監督

前作『よみがえる琉球芸能 江戸上り』は沖縄県内で何度も上映され、ドキュメンタリー映画としては異例のヒット作となった。そんな本郷監督が次のテーマに選んだのは、琉球王国時代に清から派遣された冊封副使の徐葆光。彼が1719年に来琉した際、見聞きしたことを記録した『中山伝信録』は、琉球史を知る上で非常に有名な文献の一つだ。徐葆光の見た琉球をテーマにした新作について、話を聞いた。

東京で数多くのテレビ番組の演出を手掛け、映画『軍隊をすてた国』『人として生きる』などで編集を担当。2011年に初の監督作品『よみがえる琉球芸能　江戸上り』が公開される。江戸幕府へ派遣された琉球の使節団が披露していた伝統芸能の復元に取り組む人々を追った同作品は沖縄県内でドキュメンタリー映画としては異例のヒット作に。2011年の映文連アワードソーシャルコミュニケーション部門優秀賞を受賞。

contents

作品タイトル「クイナが踊るヤンバルの森。」

ヤンバルクイナが数羽集まり、かくれんぼ。豊かな自然に囲まれて幸せそうに飛び跳ねるその様子から美しい自然と沖縄らしい風景に囲まれた島の魅力を表現。

表紙イラストについて

与儀 勝之 Masayuki Yogi

琉球イラストレーション作家　那覇市生まれ。

誌名「南ぬ風（ふぇーぬかじ）」とは…

南ぬ風は、梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことです。この南の風によって育まれてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せ全国に発信していきたいと思います。

美ら島をつなぐ人…… 02
沖縄のこころ…… 04
美ら島生き物日記…… 05
調査研究…… 06
首里工芸品…… 07
普及啓発…… 08
御城物語…… 09
管理運営…… 10
スポットライトの向こう側… 12
沖縄の大木…… 13
財団いんふぉ…… 14
美ら島ワクワク工作室… 裏表紙

2012年10月1日、財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団は『一般財団法人 沖縄美ら島財団』となりました。

『よみがえる琉球芸能 江戸上り』

江戸時代、18回にわたって江戸へと旅した琉球使節団には、芸能を披露するためのスペシャルチームも同行。踊り手である美少年たちは、道中各地で一種の琉球ブームを巻き起こすほどの人気ぶりだった。音楽、衣装、踊りなど、その江戸上り芸能の復元に取り組む人々を描いたドキュメンタリー作品。

沖縄には、撮りたい素材がたくさんある。

―前作の『よみがえる琉球芸能 江戸上り』では、貴重な伝統芸能の映像が高く評価されましたね。

1609年の薩摩による琉球侵攻以後、江戸幕府の将軍代替わりと、新しい琉球国王の即位のたびに、首里王府から琉球使節団が江戸まで派遣されました。彼らは薩摩屋敷や江戸城で音楽や舞を披露していたんですが、絵巻や同時代の資料を元に綿密な調査をして、この琉球芸能を復活させたのが琉球舞踊の又吉静枝先生をはじめとする専門家の皆さんです。『よみがえる琉球芸能 江戸上り』は、東京の三越劇場でこの芸能が上演されるまでを追いかけました。撮りながら、関係者のご尽力には、頭が下がる思いでした。

―次のテーマは徐葆光。清の時代まで東アジアには、中国の周辺国が朝貢をして、皇帝に国王であることを認めてもらう冊封体制がありました。皇帝の使いである冊封使が各国へ出向いて承認式を行うという秩序の中に、琉球もあったわけですが、合計23回の琉球への冊封の中でも、特に徐葆光は有名人ですね。

1719年、尚敬王の冊封の際に副使として来琉したのが徐葆光です。琉球史の世界で徐葆光が有名なのは、当時の琉球について詳しく書き記した冊封使録『中山伝信録』のためですが、これは公式記録。実は、彼は琉球へ旅立つ前から、プライベートな漢詩を書き綴っていました。2003年に、その『奉使琉球詩』が鄔揚華さんによって奇跡的に発見されたんです。公式の行政記録とは異なり、実に生き生きとした描写がなされているんですよ。今回の映画では、これらの文献を元に、徐葆光の目を通して、当時の琉球の芸能や食、風俗を描いています。中国の料理人に冊封使を歓待した料理を再現してもらったり、今ではなくなってしまった琉球芸能を復元したり、浙江省の映画村では徐葆光が副使に任命される様子を再現した映像も撮影しました。

―盛りだくさんな内容で楽しみです。彼が来琉した1719年といえば、玉城朝薫による組踊が初めて上演された年でもありますね。

徐葆光と同時代の琉球には、名宰相として知られる程順則（名護親方）や蔡温、組踊の創設者で踊奉行の玉城朝薫という人々がいます。言わば琉球文化のルネッサンスの時代ですね。僕は、最高の時代に、中国から最高の記録者が来たと思っています。彼らのこころの交流も、大切なテーマの一つですね。

―この時期に制作された理由は？

撮影を行った2012年は沖縄の本土復帰40周年であり、日中国交正常化40周年でもありました。尖閣問題で日中関係はギクシャクしていましたが、中国ロケはまったく問題ありませんでしたよ。徐葆光の時代の中国は、康熙帝により安定した政治が行われ、冊封体制の頂点である中国が「徳」をもって周辺諸国に君臨し、それに対して周辺諸国は「礼」を尽くしてきました。国のありようとして、いい時代だったのだと思います。こういう歴史があったことを、中国の人々にも知ってほしいですね。どちらが上という上下関係ではなく、お互いを思いやるこころがあれば、交流から文化が生まれます。逆にギスギスした交流しかない時代には、武器が発達するかもしれません。できれば日中両国で上映できるとうれしいですね。

―本郷監督はこれだけ琉球・沖縄史を掘り下げていらっしゃいますが、この次の作品のテーマも沖縄ですか？そろそろ他のテーマを撮りたくなってくる頃では？

沖縄をテーマに撮り続けていると飽きませんか？とかネタが尽きませんか？とかよく聞かれるんですよ（笑）。そんなことは決してありません。僕にとって、沖縄は宝の山！題材の宝庫なんですよ。これからも、まだまだ沖縄を撮り続けます。

『徐葆光が見た琉球』

歴史家などへのインタビューや中国ロケでの再現映像も収録。御冠船料理（冊封使を接待した料理）や芸能の復元により琉中交流史に迫る内容は、話題作となること間違いなし。2013年10月5日より那覇市桜坂劇場その他で上映。

美ら島 生き物日記 Vol.3

謎に包まれた「マンタの回遊ルート」

写真・文
白鳥岳朋（しらとりたけとも）

東京生まれ、沖縄在住の水中＆陸上　全天候型カメラマン。
1988年から水中撮影を開始。
主な著書・写真集に『おさかな接近術』（阪急コミュニケーションズ）、『水中を撮る!』（雷鳥社）など。

「大潮後からその後の中潮」「上げ潮」「夕方」など、マンタの出現する確率が高い条件は地域により色々と言われている。慶良間諸島（最上）や石垣島（上）では、諸条件に合わせ観察にいく人も多い。
とは言え、それはごく決まったエリアのおおよその話しで、さらに「点」の数は少ないし、「線（回遊ルート）」は殆ど未知の世界。

通称マンタ。その大きさと優雅さで、ジンベエザメと並んで人気の高い大型魚類だ。そんな魅力的な魚は、知れば知るほど興味深い。いや、未だ謎に包まれた部分が多いからこそ、より魅力的に見えるというのが適切かもしれない。

沖縄でも慶良間諸島や石垣島の海域で、プランクトンの補食や繁殖行動のために、夏から初秋の大潮後の中潮に観察できるポイントがある。一方、冬から春にかけては、久米島や宮古島周辺、そして黒島などでよく見られる。

とは言え、自然界で交尾のシーンが撮影されたのも小笠原諸島でただ一回あるだけ。沖縄での回遊も、少しだけ「点」では分かっているが、それぞれを結ぶ「線」になるまでは解明できていない。

「最近まで、国内で見られるのは同属のオニイトマキエイだけだと考えられていたのですが、２００９年12月に研究論文が公表され、沖縄でもナンヨウマンタが見られることが判明しました」とは美ら島研究センター戸田実 主任技師。沖縄美ら海水族館ではナンヨウマンタの飼育に世界で初めて成功した。さらなる生態解明を望むところだ。

沖縄のこころ Vol.3

地域の伝統・文化を支える人たち

名護市・川上の操り獅子

糸で吊るした人形獅子を操る「操り獅子」が伝わるのは、今帰仁村謝名と本部町伊豆味、そして名護市の川上の三カ所。中でも、親子の獅子がいるのは川上だけ。大変珍しいのだ。

「川上の操り獅子は、今から約１５０年前に疫病が流行した時、学校の先生だった翁長良業という方が、厄払いのために村に親子の獅子を寄贈されたのが始まりです。大きな獅子だけでは子どもたちが怖がるからと、ヤマトゥの操り人形を参考にして、子獅子を作ったと伝わっています」

と語るのは、区長と操り獅子保存会会長を兼任する平光男さん。現在の獅子は親子とも戦後復元されたものだとか。戦前までの親獅子の頭は、米兵が戦利品として持ち去ってしまい、その後の火事で子獅子も焼失した。

「私の父、泉辰吉が現在の親獅子、子獅子の頭を作りました。ちょっとネコに似た感じの顔で、目には防弾ガラスが入っているんですよ」

とは、保存会の泉辰則さんだ。

操り獅子は1年おきに開催される豊年踊りのトリを飾る演目。「いちはなり節」に合わせて、舞台中央の玉に2体の子獅子が飛びつくような動きを見せる。体長数十センチほどの子獅子が舞う姿は愛らしく、舞台の袖で親獅子が見守るのも微笑ましい。

「ネコを観察して、子獅子が生きている感じをどう表現するか考えます。手先だけ使ってもうまくいかない。獅子と一緒に自分の体も大きく動かして、この動きが出るんです」

とは、保存会の宮城文信さんだ。20数年前に一度途絶えた操り獅子を、現在の保存会メンバーで復活させた。国の無形民俗文化財にも指定され、沖縄県内のイベントや東京の国立劇場などでも上演。２００５（平成17）年度には、海洋博公園でも上演された。

琉球漆器の名器、朱漆花鳥七宝繋密陀絵沈金御供飯をここに復元！

首里城公園開園20周年記念特別展「首里城に魂を！」の第2弾は、「琉球の漆工藝」というテーマで2012年9月6日(木)から南殿二階特別展示室で開催しました。この特別展では、首里城公園が開園から20年間、収集してきた琉球漆器の逸品や、復元製作を行った漆工品の展示を行いました。

その中でも目玉といえるのは、名古屋の徳川美術館所蔵の朱漆花鳥七宝繋密陀絵沈金御供飯でした(以下、御供飯と略す)。この御供飯、徳川家康の遺品で、家康没後、尾張徳川家初代藩主の徳川義直に譲られたことが、遺産の目録である『駿府御分物帳色々御道具帳』という記録に残っています。この道具帳の記述を紹介すると、「一、唐食籠」が記述され、その食籠に「ちょうぎ(定器) 七つ入こ。中もり 拾。たい(台) 拾。茶たい(台) 弐。せうたい(小台) 壱。」とあり、これらの器物が「壱組」あるとされています。要するに大きな食籠の中に、たくさんの器が入っていて、それで1セットを構成するというものです。「唐食籠」とありますが、これは、当時日本製の器物(和物)でなければ、東アジア製の器物は全て「唐物」と表現され、中国製だけでなく、朝鮮製や琉球製の器物も総称して「唐物」と呼んでいたようです。そして、その中に「中もり」が十個「たい」(台)が十個とあり、御供飯の内部にあり、周囲に置かれているそれぞれ10個の蓋付の椀と、それを載せる小さな足付盆のことだと思われます。その中央に「ちょうぎ」(定器)とあり、その定器が「七つ入こ」であったとしています。残念ながら、中央の椀は一個しか残っておらず、七つの入れ子椀の内部の六つは無くなっていますが、それでも記録が伝来しており、実物が現存している琉球漆器としては、極めて稀な事例です。そのため、この御供飯は、琉球漆器で国指定重要文化財となった第1号の貴重な資料です。

首里城公園を管理運営する沖縄美ら島財団は、徳川家康の遺品であるこの琉球漆器を形だけでなく、無形の製作技術も一緒に復元しようという取り組みを2007年から開始し、2012年まで約5年をかけた長期の調査や、製作実験を繰り返して復元製作にこぎつけました。

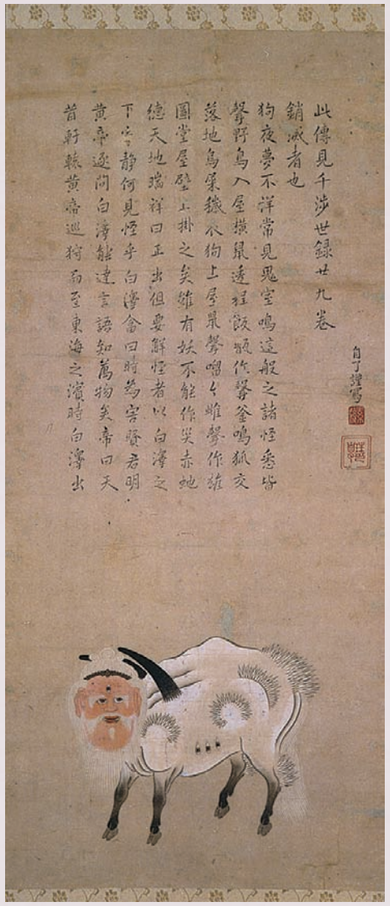
朱漆花鳥七宝繋密陀絵沈金御供飯／徳川美術館所蔵の原資料は、国指定重要文化財となっている。左上は、作業風景。

その調査の一部を紹介しますと、まず木地は、これまでの琉球漆器の概念ではデイゴと皆さんは認識されていらっしゃると思いますが、レントゲン撮影をしてみると、木地は針葉樹系の木材であり、それを脚部は六つの脚があるが脚部ごとに製作して接合する寄木細工であったり、蓋は、巻胎と呼ばれ、木のテープをコイル状に巻き上げて成形するという現在では、記録も古い職人さんたちの記憶にも残っていない非常に珍しい技法で製作していることが判りました。もちろん、そのような木地を成形する技術は現在の沖縄には残っていなかったので、製作技術を練習するところから、この製作事業は始まりました。復元製作のために、まずは、無形の技術の育成からスタートするという困難な事業でした。この無形の技術の育成から始めるという取組みは、木地製作だけでなく、漆塗りの部分や沈金や密陀絵と呼ばれる加飾部分の復元製作にも及び、様々な技術的な壁を乗り越え製作が完成しました。

(上江洲安亨)

首里工芸品 Vol.1

「白澤之図」 はくたくのず



作　　者:城間清豊(1614～1644)
　　唐名:欽可聖、雅号:自了
製作年代:17世紀前半
紙本着色／軸装　本紙:縦80.0cm×横35.6cm
※沖縄県指定有形文化財

白澤は中国の伝説上の帝王である黄帝が東海に巡狩した時に出会った神獣で人語を解した聖獣です。目は顔に三つ、胴に六つ合わせて九つあるといいます。白澤は有徳の王の治世に現れるといわれていました。

作者の城間清豊は雅号を自了といい、記録の上では琉球の絵師で最も古い人物。口と耳が不自由だったが絵の素質は抜群でした。尚豊王を冊封した冊封使杜三策は、彼の作品を見て当時中国でも著名な顧虎頭・王摩詰にも匹敵すると絶賛したそうです。また、江戸上り時に琉球使節団が自了の作品を持参したところ狩野派の絵師狩野安信がその作品を見て、我が国にいたら友としたいと賞賛したと伝えられます。自了の絵と伝えられる作品は数点ありますが、この絵は落款もあり確実に自了の絵といえる唯一の作品です。

また、戦前本資料を鎌倉芳太郎が撮影しており、当時は豊見城朝熙家にあったことがわかっています。

なお、本資料の紙からカルシウムが検出されており、紙全体にはカルシウム系白色材料(胡粉)が塗られているようです。白澤の白色の身体、頭髪、顎鬚部分からは、鉛が検出され、鉛白による着色が行われています。顔の肌色部分からは鉛と水銀が検出され、鉛白と辰砂の混合による色が使われているものと思われます。(上江洲安亨)

地域連携事業 首里大学（市民大学）への協力

首里大学とは、首里振興会と那覇市歴史博物館が主催し、おきなわ県民カレッジとの連携講座となっている取り組みです。平成24年度で3期目となっており、申し込み制で全5回の講座となっています。第1期目も沖縄美ら島財団から講師派遣を行いましたが、第3期となった平成24年度は、全5回の講座中、第3回と第5回の講座に当財団から2人の講師を派遣しました。

第3回の講座では、首里城公園管理部の幸喜淳 調査展示係主任（当時）が、「首里城の彩色と塗装について」という題目で行いました。

一般的に首里城の赤い塗装や、金色、五色の彩色がペンキと同じくらい簡単な仕様と誤解されている向きがあるところを首里城は天然素材にこだわり、下地・中塗りは漆を使い、上塗りは本土でも、あまり使用しない桐油という乾性油を媒体として、弁柄という酸化第二鉄を使った顔料を使って赤く塗っており、塗装の作業は、日々の温湿度に影響を受ける難しい作業であることを紹介しました。また、現在弁柄は既製品を使用していますが、往時は琉球国内での調達を試みた形跡も文献史料にはみえるため、県内の土を使って弁柄開発ができるか研究中であることや、その成果として、淑順門の漆塗装には、県内で産出した土を使って生産した赤い塗料を半分、既製品の弁柄に混ぜて行ったことも紹介しました。

第5回の講座では、首里城公園管理部の上江洲安亨事業課長補佐兼調査展示係長（当時）が、「首里城に魂を！ 海洋博覧会記念公園管理財団の取り組み」という題目で行いました。

当財団が20年間、地道に行ってきた琉球関係文化財収集の実績として県指定文化財3件を含む多くの文化財を救うことができ、20周年特別展で展示していることを報告し、首里城公園への来園を呼びかけました。また、当財団が取り組んだ復元製作物の成果である正殿二階の皇帝御書扁額3枚の復元や、徳川美術館所蔵の「琉球楽器」一式の復元、朱漆花鳥七宝繋密陀絵沈金御供飯の復元製作事業について、完成までの困難な過程を丁寧に紹介しました。さらに、今後の取組みとして首里城正殿一階の正月儀礼で試用された三御飾道具の復元事業が着々と進捗していることを報告しています。また、当財団が収集した森政三コレクションの中に、現存する中では中城御殿の唯一の図面である中城御殿御普請板図が残されていたことを紹介し、発見の経緯や資料の重要性を説明し、沖縄県の進める中城御殿の復元整備にも影響を与える一大発見であったことを強調しました。

首里城建造物の漆塗装に関する調査研究や、資料収集事業、復元製作に伴う調査研究事業は、地道で非常に地味な取組みですが、消えてしまった琉球王国の歴史・文化の情報をひもとく重要な「鍵」となるものなので、今後とも研究成果等の情報公開は積極的に行っていきたいと考えています。

（上江洲安亨）

御城物語（うぐしくものがたり） Vol.2

かつて、首里の人々が「御城（うぐしく）」と呼び、敬愛のまなざしで見上げた首里城。
首里城とその周辺に関係するトリビアを語る歴史エッセイ。

正殿玉座に描かれた花　クレマチスのお話

正殿二階のことを記録では、大庫理（うふぐい）といいますが、その中央には、須弥壇（しゅみだん）と言って、床よりも高くなった部分があり、そこに王様の玉座があります。須弥壇の周囲には高欄（こうらん）という黒い手すりがついていますが、この高欄に花が描かれていることをご存知ですか。

黒い漆の地色にひときわ目立つ、金色の線彫りで「クレマチスの花」が描かれています。この金色の線彫りは、沈金という漆器製作の伝統的な技法の一つで、そんな漆の技法でクレマチスの花が描かれているのです。

クレマチスは、バラや藤の花と並んでイングリッシュガーデンによく使われる花として、知られていますが、実は東アジアでは、文献史料に鉄線（てっせん）と表記されている花なのです。この鉄線、元々は中国原産の花なのですが、中国から西洋に伝わった際には、クレマチスといわれ、朝鮮半島から日本本土や琉球に伝わった際には、中国語の表記と同じ鉄線といわれて伝えられた花なのです。

琉球王国の王様の玉座にイングリッシュガーデンで登場する花が描かれるなんて、信じられないかもしれませんが、中国原産の鉄線は、江戸時代にその花模様が工芸品や女性の小袖などの衣裳のデザインとして日本本土で大流行し、その影響で琉球でも鉄線の花模様がデザインとして工芸品や衣装に取り入れられたと考えられています。

このクレマチスも、前回お話した正殿二階の玉座の下の羽目板に描かれたブドウやリスと同じで、琉球の人々は本物の花を見たこともないはずですが、琉球人の絵師達は、日本本土の流行を敏感にキャッチして流行している鉄線の図案を取り寄せ、正殿の玉座に描いたのだと思います。さしずめ、現代的な言い方をすれば、江戸や上方（関西地方）で流行る「最新モード」で、玉座の模様としたと言ってもよいのではないでしょうか。

もしかしたら、王様の玉座下に描かれたブドウとリスは中国伝来の模様で、玉座の高欄に描かれたクレマチスは、元々中国原産の植物でありながら日本本土で流行した後で、琉球に伝わったデザインなので、日本的な模様と当時の琉球人は理解していたのかもしれません。そのため、王様の玉座に中国の模様も、日本の模様もバランスよく使っていたとも考えられます。日本と中国の間に横たわる南西諸島にあった王国ならではの配慮だったのではないでしょうか。真実は、遠い琉球王国時代の彼方のことなので、玉座のデザインの組み合わせの秘密は、今となっては何とも言えませんが、そんな当時の琉球の人々への思いを想像しながら、首里城正殿を見学されても面白いのではないでしょうか？

首里城正殿の玉座に描かれた花、ぜひぜひご覧になってみて下さい。

（上江洲安亨）

正殿2階御差床（左）や御差床の高欄（右）に描かれているクレマチス

首里城公園 奉神門

漆と桐油で彩られた首里城の弁柄色を守る奉神門外壁の塗り替え

奉神門の修復作業。観光で来た人は「工事中か」とガッカリすることも多いだろうが、「職人としては、修復の現場に遭遇することは滅多にないので、しっかり見て楽しんでいただければ」と當眞さん。

首里城メンテナンスの現場は技術を継承する場でもある

本土はモノトーンをベースにした城が多いのに対し、首里城は深い赤が特徴。この弁柄色は、漆と桐油塗りによるものだ。紫外線や風雨にさらされている漆の美しさを保つには、当然メンテナンスも必要となる。

「王府がどんな頻度で、どんな工程でメンテナンスをしていたか。行政的な記録はありますが、詳細を伝える古文書は残っていません」と語るのは、首里城公園管理部の幸喜 淳 調査展示係長だ。王府には貝摺（かいずり）奉行という部署があり、重要な輸出品として漆芸品に力を入れていた。首里城の補修も貝摺奉行が担当したのだが、現存する資料の範囲内では具体的な工程は不明だという。

現在の首里城が完成したのは1992（平成4）年。漆の塗り替えは14年後の2006（平成18）年に正殿から開始。2012（平成24）年からは奉神門の塗り替えが始まった。メンテナンスに携わる漆職人は、工芸品の復元製作と首里城の修復の両事業に携わる人が多いという。10年以上間隔があると、職人から職人への細かな技術の伝達が途切れてしまう可能性が高い。器物の仕事と、規模の大きい建造物の仕事では勝手が違うこともある。漆職人の一人、當眞茂さんは語る。

「技術的な面では、他の文化財に学ぶことも多いんですよ。例えば、海の上に建っている厳島神社で研修をして、塩害対策について向こうの技術者と情報交換もしました」

「歴史上、何度も修復されている日光東照宮は、その時、その時で良いとされている塗りを施しています。沖縄だけだとどうしても情報が限られるので、僕らも外の情報を得て、勉強しながらやっています」とは幸喜さん。漆は高温多湿の環境で酸化が進み、よく乾く。温度・湿度を一定に保つため、工芸品なら塗ったものを室（むろ）と呼ばれる木製の倉庫に入れる。ところが建築物の場合、柱や壁ごと室に入れるわけにはいかない。管理の難しさについて、當眞さんはこう言う。

「同じ建物でも、場所によって温度・湿度は異なります。同時に塗っても、乾き方が違えば仕上がりの色も違ってくる。調整が難しいんですよ。今日は北風だからやめておこうとか、その時の気象条件によって作業も影響をうけます。室内のほうが管理しやすいので、奉神門外壁は、壁板など外せるパーツは取り外して、作業場に運んで漆を塗っています。そのほうが効率よく仕事ができます」

今も発掘・復元作業が続く首里城。奉神門のメンテナンスも、専門家の集まる検討委員会がある。幸喜さんは委員会と現場の間で調整役を担う。

「作業場での実験ではうまくいったことが、気象条件の影響を受ける現場ではうまくいかないこともあります。琉球処分や戦争で、職人さんたちが持っていた技術が分断されていることの影響は大きいですよ」

首里城は沖縄のアイデンティティの象徴や観光の目玉というだけでなく、瓦、木造建築、漆、石積みなどあらゆる分野で技術を継承する「現場」を提供している。當眞さんをはじめ、本土で言う宮大工のような人材が、その現場で育つことの意義は大きい。

當眞さんは言う。

「何十年か後の職人が、僕らの残した仕事を見ながら、また下地から塗っていく。首里城は有名な観光地でもありますし、ヘタな仕事はできない！という緊張感があります」

生漆（きうるし）。これに顔料を加えると、黒漆や朱漆などカラフルな漆になる。

奉神門の扉。成人男性が5～6人がかりでないと持ち上げられないほど大きい。

壁板や門扉などを格納できる室（むろ）。これほどの規模は珍しい。

左：幸喜 淳 調査展示係長。建物の補修だけでなく、さまざまな漆芸品のお宝を担当している。右：當眞 茂さん。自身の作品制作と首里城の現場、両方に取り組む。

①ニービ（非常に粒子の細かい砂岩）を混ぜ込んだ下地を塗り、滑らかな面をつくっていく。②壁板に黒漆を塗り、サンドペーパーで研ぐ。この状態で首里城へと運び、上から弁柄色の桐油を塗っていく。

③奉神門の屋根のすぐ下の部分。地上からハッキリとは見えない部分も、しっかりと修復する。④制作中の奉神門扁額。スペアを作って交互にかけると長持ちするという。⑤奉神門の塗りの工程。19もの工程があり、塗っては乾かし、塗っては乾かしを繰り返す。

首里振興会

理事長 **永山 潔**（ながやま きよし）

「みんなの宝物である首里城を、首里の人間が大事にしないでどうするんですか。そういう気持ちで、ソフト面から首里城を支えたいと考えています」と語る、首里振興会の永山理事長。中秋の宴、首里城祭、琉球王朝祭り首里と、秋の首里はイベント続き。子どもからシニアまで、幅広い年代の地域住民が気持ちよくイベントに参加できるよう、地域の調整役も担っている首里振興会。首里のまちになくてはならない、縁の下の力持ちに話を聞いてみた。

―首里振興会は、毎年11月3日に開催される「琉球王朝祭り首里」の主催団体です。「琉球王朝祭り首里」の歴史について教えてください。

永山「１９６０（昭和35）年に『教育まつり』としてスタートしておりますが、１９６５（昭和40）年に『首里文化祭』に名称変更しました。今年２０１３（平成25）年で第48回目を迎えます。『教育まつり』は、本土復帰前、まだ戦争の傷跡が残っている時代に、『青少年の向学心の高揚と健全育成』を主旨として、地域の有志が始めました。首里は教育・文化発祥の地として、戦前から一中や師範学校などが集中する文教のまちでもありました。戦後も、首里城の復元前は琉球大学があって、やはり学生が多いまちでした。『教育まつり』は、琉大の10周年と首里高校の80周年を機にスタートしたんですよ。復帰後の１９７８（昭和53）年から、王朝時代の王様の行列を復元した古式行列も始めました。さらに２００７年（平成19）年からは『琉球王朝祭り首里』に名称を変更して、主催団体としても首里文化祭実行委員会から首里振興会に名称変更をしました。それを機に、我々も新体制で祭りにのぞんでいます」

―２００７年からの新体制とは？

永山「それまで別々のイベントとして開催していた首里城祭と首里文化祭をドッキングしましょうということで始まりました。首里城祭の開催期間を11月3日までと位置づけ、琉球王朝祭り首里の古式行列には、沖縄美ら島財団で毎年公募されている国王・王妃にも参加していただきます。『首里文化祭』では国王の乗る駕籠である御轎（うしこし）を復元していましたが、中に国王役の人が乗ることはありませんでした」

―その御轎は今、那覇市役所首里支所に展示されていますね。

永山「復元の際には一部軽量化も図りましたが、重さが５００キロ近くもあるんですよ。現在は車輪のついたイベント用の御轎を財団にお借りしています。それから、古式行列は国王が正月三日に首里の三つの寺を参詣される三箇寺初行幸をモチーフにしています。当時、王妃は参加されていないんですが、イベントの演出としては国王だけというのもちょっと寂しいですよね。そこで国王・王妃にペアで参加してもらうことにしました。それから、国王・王妃の衣装も首里城祭とは異なります。王妃の打掛は首里織です。首里織は王朝時代に儀式の席などで着用されていた歴史がありますこだわりがあるんです」

―古式行列の見どころは？

永山「古式行列は、摂政と三司官が首里城に国王・王妃をお迎えにあがる場面からスタートします。正殿の正面から国王がお出ましになるのは『琉球王朝祭り首里』の時だけなんです。路次楽（ろじがく）も演奏されて、何とも言えない重厚感がありますよ。国王・王妃は正殿の階段を下りて、奉神門から瑞泉門、そして歓会門を通って守礼門まで長い距離を歩かれますから、あえて衣装は軽装にしてあります」

―なるほど。首里振興会では他にどんな活動をされていますか？

永山「首里文化祭実行委員会からの実績を受け継ぎながら、ちびっ子相撲大会、語やびらしまくとうば大会、囲碁大会などの他、首里大学などの新しいイベントも開催しています。首里城との協力体制では、首里鯉のぼりまつりや、新春の宴などでの旗頭の展示・演舞もありますね。首里城でのイベントには制約もありますが、振興会が地域の自治会・青年会と沖縄美ら島財団との調整役を担っているんです。『琉球王朝祭り首里』も、２年後には50周年。県内全域から、また県外からの観光客の皆さんにも楽しんでいただきたいですね。地域としては、毎年、高校生たちが祭りへの参加の他、ボランティア活動でゴミ集めをしてくれるようになったことも大きいと思います。『教育まつり』が原点ですから、地域の子どもたちが参加してくれるのはうれしいことです」

古式行列は首里城を出て、綾門大道から首里城前交差点を右折、池端交差点から龍潭通りを鳥堀交差点方面へと抜ける。路次楽も演奏され、往時さながらの雰囲気。古式行列の後には地域住民による祝賀パレードが続く。首里中学校の吹奏楽部から各地域の旗頭や獅子舞の演舞もあり、11月３日は龍潭通り全体が祭り会場に様変わり。

首里の伝統を受け継ぐ旗頭。パレードの途中数カ所で止まって演舞を披露する。パレード後は首里中学校グランドで、どの青年会が美しく旗頭を舞わせるかを競い合う「ガーエー」も開かれ、圧巻だ。

ハゼノキは中国、インド、マレーシアに至るアジアの広い地域に分布している落葉高木です。日本でも西日本の山野で見ることができますが、在来種か大陸よりもたらされた栽培種が野生化したものか起源はよくわかっていません。

果皮からとれる木蝋（もくろう）は蝋燭の原料となり、その製法は琉球を介して中国より日本に伝えられました。工芸作物として３００年以上前には鹿児島で栽培され、その後西日本各地に広まったとされています。現在では石油を原料とする洋蝋燭の普及により栽培は少なくなりました。

ハゼノキはウルシ科の植物で、外見もウルシとよく似ています。ウルシといえば葉に触るとかぶれることで有名ですが、ハゼノキも同様で肌が弱い人は注意が必要です。ただ、ウルシほどひどくかぶれることはありません。ウルシとの違いは葉が細長く、毛がないことです。

今帰仁村の「諸志御嶽の植物群落」は国指定天然記念物であり、3ヘクタールと小さいながらも貴重なやんばるの自然が保護されています。国道のすぐそばにも関わらず、少し足を踏み入れれば鬱蒼とした森が広がり、多様な木々を見ることができます。その中にハゼノキの大木があります。高さは１０メートル、幹周2.4メートルにもなるその姿はこの地に古くより息づいていたことを物語っています。

この植物群落は昔から人とのかかわりが深く、信仰上の聖域として扱われてきました。また、明治時代には森のもつ河川の水量調整機能を活かすため保護されてきました。そのため、大木が育つような貴重な自然環境が維持されてきたのです。このハゼノキの大木は木蝋の原料としてではなく、森の番人として人々の役に立っているようです。（佐藤裕之）

第9回 インド・太平洋 魚類国際会議の開催

沖縄美ら島財団が共催する「第9回インド太平洋魚類国際会議（6月23日-28日・沖縄コンベンションセンター）」および関連行事が開催されました。

本会議には世界各国から530名を超える魚類学者が集い、過去最大規模となりました。7月6日には東京の国立科学博物館にて、魚類の多様性に関するシンポジウムも開かれました。レセプションには、魚類研究者や、国際会議の開催に協力した団体の方々とご歓談なさいました。

当日は、経団連会長である米倉住友化学会長をはじめ、当財団から花城常務・井口事務局長・内田研究顧問および佐藤研究第一課長が参加し、全員で会議の成功を祝いました。

太平洋魚類国際会議の様子と、沖縄美ら島財団へ贈られた開催記念の楯

『ちゅらうみ しおソーダ』好評発売中！

今夏、沖縄美ら島財団オリジナルの炭酸飲料『ちゅらうみしおソーダ』を新発売しました。

『ちゅらうみ しおソーダ』は、沖縄美ら海水族館、ミネラル含有数世界一の宮古島の塩「雪塩」、素材を生かした料理で有名なイタリアンレストラン「アル・ケッチァーノ」のオーナーシェフ奥田政行氏とのコラボにより誕生した炭酸飲料です。

奥田シェフ監修のもと、沖縄のサンゴ礁を思わせる爽やかな色のソーダに、ミネラル豊富な宮古島の「雪塩」を加えることで、さっぱりとした味わいに仕上げました。

海洋博公園限定で発売中です。お土産に最適な化粧箱入り3本パックもご用意しております。海洋博公園にお越しの際は、ぜひお買い求めください。

海洋博公園限定の3本入り化粧箱も
お土産に最適なデザイン

海洋文化館展示ホール「夏休み先行オープン」

海洋文化館展示ホールは、2013年10月のグランドオープンに先立ち、2013年7月20日～9月1日の間「夏休み先行オープン」しました。

期間中には、海洋文化館展示ホール内ステージでのポリネシアンダンスやタヒチアンダンスなどのスペシャルステージ・オセアニアンワークショップ・伝統漁具作りやオセアニアのお面づくりなどの工作体験・スターウィークと題して星座早見シート作りや宇宙服試着体験などを開催しました。

今回のリニューアルでは、展示ホールが6つのゾーンに分かれており、テーマ毎に展示構成されています。

目玉としては、①国内初の「ハンドデジネ」と呼ばれる「続き漫画」の手法で「伝統的航海師になるまで」と「伝統的なカヌーづくり」をわかりやすく紹介（ゾーン2）②床面と壁面を大型スクリーンとして利用し、ダイナミックな映像で海洋文化等を紹介（先行オープン時はデモ画像）（ゾーン2）③沖縄県内で60年ぶりに復元されたマチキフニ（マルキンニ）や本ハギサバニ・南洋ハギサバニ等を新たに展示します。（本ハギサバニはグランドオープンより展示）（ゾーン5）

他にも太平洋地域の伝統的なカヌーの展示や体験用サバニの展示など見どころ満載となっております。海洋文化館展示ホールのグランドオープンに是非ご期待ください。

ステージで行われたイベントの様子

航空会社とのタイアップを実施
日本トランスオーシャン航空「ジンベエジェット」スカイネットアジア航空「空恋プロジェクト」

皆さんはもう「ジンベエジェット」をご覧になりましたか？

2012年12月、開館10周年を迎えた沖縄美ら海水族館と創立45周年を迎えた日本トランスオーシャン航空（JTA）がタイアップし、ジンベエザメを機体にデザインした特別塗装機「ジンベエジェット」を就航させました。本タイアップは沖縄美ら海水族館とJTAが、沖縄の観光振興、沖縄の魅力の発信の役割を果たしたいという共通の目的のもとに実現しました。現在、「ジンベエジェット」は那覇空港を拠点に全国を飛び回っています。

機体ラッピング（蘭・桜・椿）

機体ラッピングイメージ

そして今年は、新たにスカイネットアジア航空（ソラシドエア）とタイアップしたプロモーションを10月からスタートします。

本タイアップは、沖縄県の観光振興策事業「平成25年エンターテイメント創出・観光メニュー開発等支援事業」「元気プロジェクト」へ沖縄美ら島財団が【日本一早い春の到来をジェット気流にのせて告げる】というコンセプトで応募した結果、採用されたものです。本事業は、沖縄の冬の観光コンテンツである花々をもちいて「やんばる地域」を活性化させることを目的としています。

その主要コンテンツの一つとして、九州沖縄の翼として就航しているスカイネットアジア航空（ソラシドエア）の地域振興・機体活用プロジェクト「空恋」と連携し、PRを図る事となりました。機体に貼るラッピングについては、北部地域の冬から春の代表的な花（蘭・桜・椿）をモチーフにしたデザインを機体にラッピングし、沖縄本島北部地域を広く告知展開する予定です。

また、本事業の中で海洋博公園の告知と園内施設へのお客様の誘客促進と満足度向上を目指し取り組んで行きたいと思います。

農業生産法人
株式会社 沖縄美ら島ファーム設立

沖縄美ら島財団は本部町や東村の農家と連携して、2013年7月16日「農業生産法人株式会社沖縄美ら島ファーム（以下沖縄美ら島ファーム）」を設立しました。農業生産法人とは土地を取得し、農業を行うことのできる法人のことです。沖縄美ら島ファームの代表取締役には、当財団参与諸見武三、取締役には本部町の農業生産法人もとぷらす代表の比嘉良和氏、東村の農業生産法人和香農園代表の前川和弘氏が就任しました。

沖縄美ら島ファームは当財団のノウハウを生かしつつ、地元に密着した高品質・高付加価値の農作物を生産することで従来の農業との差別化を図り、海洋博公園や首里城公園への直接出荷や県外に向けた産地直送販売等独自の流通ルートを確保することで事業成功を目指します。将来的には6次産業化を図ることで事業の多角化を行い、地域の発展に寄与できる組織に成長する事を目標に掲げております。

事業の第一弾は高級生食用パインアップルの生産です。パインアップルは沖縄県がマンゴーに続く次の農業成長戦略基幹作物に位置付けており、近年は続々と素晴らしい新品種が開発されております。バイオ技術を駆使した種苗生産や低コストのパイプハウスによる促成栽培を行い、美ら島ブランドのパインアップルを県民や観光客の皆様に提供していく予定です。これからの沖縄美ら島ファームの活躍にご期待ください。

農業生産法人 株式会社
沖縄美ら島ファーム
Okinawa Churashima Farm Inc.